

単なる「実学」を超える力



学長
すみだ くにしげ
角田 邦重

中央大学を旅立つ皆さんに心からお祝いを申し上げます。卒業おめでとう。大学生活で、皆さんが何を学び身につけたのだろうか、我々の側から言えば、皆さんに何を提供することが出来たのだろうか、と改めて考えています。

中央大学は昔から「実学の伝統」を掲げてきました。言い換えれば「実地応用に耐えられる学問」を目指してきたと言つてよいでしょう。いたずらに華やかさを追うのではなく「質実・剛健」（質素、誠実、健康に支えられた強い意志力）の校風と相まって、学員（卒業生）を含め「目

立たないが本当の実力を備え、堅実な生き方の中大生」というイメージが形づくられてきたと言つてよいでしょう。

このような伝統は、皆さんに対する教育にも、受け継がれていますし、私は、皆さんが中央大学での学生生活を通して、これからの職業生活で生き抜く力を身につけたに違いないことを期待し、また信じたいと思います。働くことを通して社会に参加することを回避したがる若者の増大が、フリーターやニートの名で大きな関心を集めています。もちろん人件費コストの削減に必死になつてい

る企業の政策から生じている側面を無視して語ることは出来ませんが、若者のリアリティーを欠いた現実感覚や自己意識の肥大化、あるいは怯えや甘えといった人間的成長の証である自立心の欠如によるところも少なくないはずです。しかし、中大生に関する限り、その心配は無用だと思つています。

15年前のバブルの全盛期には、いろんな機会に、中大はもつと華やかさを演出しなければ若者を引きつけることは出来ませんよ、といった類いのアドヴァイスを受けたものです。しかし、世紀が変わった今、社会から要求されているのは本当の実力であつて、それは何よりも中大の「実学の伝統」に適つたものだと思います。

しかしもう一步突っ込んで考えると、この伝統の「実学」と、それを「実地応用に活かす」とことは一見して同じことのように見えながら、実際には大きな落差が存在している

と思います。それは、何よりも、実学の質が複雑化、高度化、グローバル化といった時代環境の中で大きく変わっているからです。単に、大学で学ぶのは専門的基礎教育にとどまるという意味ではなくて、何というか、新しい事態に向き合つて専門的知識を応用してぶつかる力であつたり、新しい発想力、単なる語学力を超えたコミュニケーションと文化の伝達能力であつたりといろいろですが、単なる知識ではない、知力を含めた人間的な総合力によつて、初めて両者の架橋が可能になると言いたいのです。この点で、中央大学が、法学部から理工学部、そしてもっとも実学から遠い文学部まで6つの学部を含む総合的の大学であることの意義は考えている以上に大きなものがあると思いますし、皆さんがこれから職業生活を送るようになれば、いやでも試されることになると思えます。皆さんの健闘を心から祈つていきます。